

子どもの命を守る

重大事故防止！ヒヤリハットを活用しよう

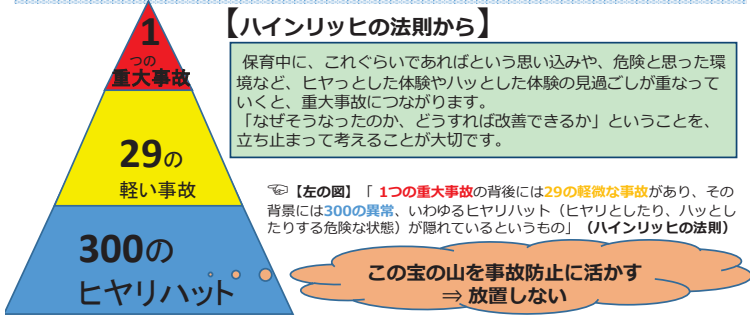
令和2年度巡回訪問「事故防止に関するアンケート」より

巡回訪問うしん7号

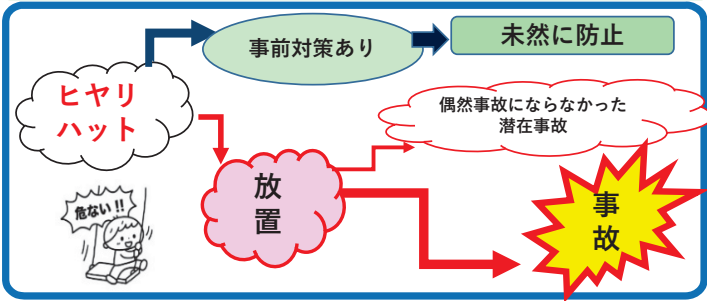
令和3年1月発行

ヒヤリハットを収集・共有・対策を練ることが、事故防止に有効だといわれています。「事故防止に関するアンケート」の結果から、ヒヤリハットのとらえ方は多様であり、職員それぞれの考え方や理解に違いがあることがわかりました。事例の中には事故と思われる内容もありました。そのため、なぜ事故防止のために「ヒヤリハット」が重要なのか、基本的な考え方、気づき、共有や活用の仕方を改めて振り返りかえてみましょう。

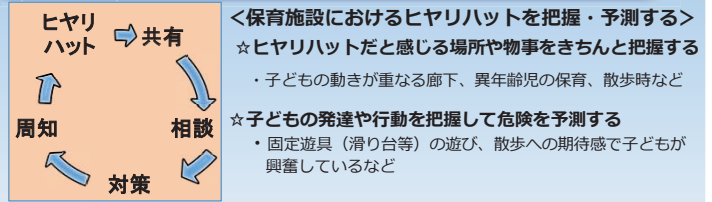
ヒヤリハットとは、重大事故には至らないものの、直結してもおかしくない一歩手前の事例に気付くことです。



ヒヤリ、ハッとしたら、対策を！



ヒヤリハットを事故防止につなげるポイント



- ①【共有】ヒヤリハットの共有をする**
☆「いつ、どこで、どういうときに、どうなったか、その原因等」の「気づき」を共有する
・共有するための手立て：口頭、付箋、ホワイトボード、連絡ノート、ミーティング、専用アプリなど
- ②【相談】ヒヤリハットについて相談をする**
☆職員間で、気づきの周知や声掛けなど、情報共有を徹底する
・互いに声を掛け合い、「〇〇は危険だね」と意識の共有
- ③【対策】ヒヤリハットの対策を考える、実施する**
☆事故発生防止にむけた共通認識を図り、対策の実施
・個々の職員が危険と感じた場面や場所を伝えあい対策を取る
・ヒヤリハットを集めて分析し、改善に向ける
- ④【周知】ヒヤリハットの対策を周知する**
☆園全体に対策を周知する
☆子ども・保護者に対する安全教育
・危険な箇所などの対策を子どもや保護者にも伝える
・保護者と協力して、廊下は走らないなど、安全な行動を身に付けるようにする



【例】

☆いつ	散歩から帰った時	対応策例 木の実は、ビニール袋に入れて、保育者が封をして子どもが持ち帰るというルールを作った
☆どこで	園庭で	
☆何をしたとき	2歳児がポケットから公園で拾ったどんぐりを出した	
☆どうなったか	ポケットから落ちたどんぐりを0歳児が拾って口に入れようとした	
☆原因	ポケットからどんぐりが落ちやすい状態だった	

ヒヤリハットの事例 ～アンケートより抜粋～

○食事



「新しい調理員が食事提供時に除去食を間違えて保育者に渡した。保育者は、クラスに戻って気づいた。改善策として、給食室内で除去食の確認方法を表にして伝えた。調理員と保育者の受け渡しの確認方法など、ミーティングでも全職員に周知した。」

○プール遊び



「プール遊び中、監視係が子どもの要求に応じ、監視に徹することができないことがあった。監視係の役割を確認し、誰もが役割を理解できるようにピスを身に着けた。」

○散歩



「散歩中、手をつないでいる一人の子の靴が脱げた。保育者が対応をしている間に、もう一人が繋いでいた手を放して、走り出してしまった。そのため、他の保育者に声をかけ、一人で対応しないことを周知した。」

○異年齢保育



「異年齢児の合同保育の際、発達にあわない玩具の部品が取れ、誤飲につながる可能性があった。合同保育のおもちゃの選択について、再度周知し、おもちゃを出す時には、発達の違い等で危険はないか共有し、その都度複数で確認することにした。」

○廊下の危険防止



(表示例)

「長い廊下で左折する造りになっていたため、出会い頭で子ども達がぶつかってしまいそうになることがあった。曲がる直前の場所にビニールテープで線を引き、『とまれ』表示を貼って止まることを伝えた。」

○安全管理



「子どもが慌てて保育室に戻ろうとして、ドアを強い力で押し開けて他児にぶつかりそうになった。集団行動に遅れそうな場合は、グループに分かれて保育者と落ち着いて行動するようにした。」

ヒヤリハットの共有を継続していく各園の工夫

- ・ミーティングで「今日のヒヤリハット」を伝え合う。
- ・ヒヤリハットを記載した付箋をホワイトボードに貼っている。
- ・クラス毎に付箋の色を変えて、簡単にしている。
- ・会議のたびにヒヤリハットタイムを設けている。
- ・日々の伝達ノートにヒヤリハットの記入欄を設ける。
- ・気づいたことを発信する人に、不利益が生じないことを園全体で確認する。
- ・ヒヤリハットを集めて分析し、客観的に把握し、保育環境に生かす。
- ・ヒヤリハットが出たら「気づいてくれてありがとう」「出してくれてありがとう」と、小さな気づきを共有しやすい環境をつくる。



コラム

～園の実践より～

□A保育園

Aちゃん(1歳)のヒヤとした行動が、Bちゃん(2歳)が1歳だった頃の行動に似ていることに保育士は気づき、1歳児と2歳児の発達の特徴を学び直した。発達の特徴と子どもの行動の特徴を照らし合わせ、見通しを持った保育ができるようになった。ヒヤリハットを共有し、対策を立てることで、気持ちの余裕が持て、「〇〇しちゃだめ！」等、禁止する言葉が減った。



□B保育園

月ごとや学期ごとにヒヤリハットを集計、分析し、どういう時間帯、どの場所で事故が起きやすいか、傾向がわかった。皆が傾向を意識し、対策を立てるなど、園内で対応する仕組みができた。

□C保育園

保護者から園内でヒヤリとしたことを出してもらい、春夏秋冬、それぞれの季節ならではの危険箇所を写真入りで「園だより」に載せて、保護者と一緒にヒヤリハットを共有する機会を作っている。

<参考資料>

令和2年度事故防止に関するアンケート結果、巡回訪問時にいただいた各園の情報、教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン、教育・保育施設等における重大事故防止策を考える有識者会議年次報告

